

「柔らかに剛き道」を行く

Following the way of softness with strength

徳富蘆花の妻、愛子。旧姓は原田。1874（明治7）年、隈府町（現菊池市）の造り酒屋に生まれた。東京高等女子師範学校（お茶の水女子大学の前身）在学中、蘆花（本名・健次郎）との縁談が決まった。

「原田愛子は才女であった。文筆も立った。亭主関白の徳富健次郎の妻にならなかつたら、明治大正の女流文学者として活躍したかもしれない」

（中村青史氏「蘆花の文学にみる愛子の役割」、2001年菊池市教育委員会発行『蘆花と愛子の菊池』所収）

1919（大正8）年、当時としては珍しい夫婦2人での世界一周旅行についてまとめた「日本から日本へ」は、蘆花と愛子の共著となっている。時期は前後するが、1901（明治34）年に刊行されベストセラーとなった蘆花の小説『思

出の記』の冒頭部分。「九州の一寸真ん中で」と始まる隈府の風景描写の見事さ、しかしその実蘆花がこの時一度も菊池を見たことがなかったという事実から、ここは愛子の手になる、少なくとも手が入っていると考えざるをえないと、中村氏は指摘する。「癩癩持ちで：困った夫」であった蘆花を経済的に、文学的に、精神的に支えたのが愛子だった。

愛子は「黄花」「蘭芳」のペンネームで総合文芸誌にエッセーを掲載している。その中にお世辞をいう必要はない、だからといって人を怒らせるようなストリートな物言いもしない、人づきあいには「素直に柔らかに剛き道」がある、という意味の一文がある。柔軟だが、折れない、負けない。たくましく、包容力をもって。愛子という生き方である。



徳富蘆花と愛子。1922（大正11）年2月撮影

横井小楠記念館 （四時軒）

Shonan Yokoi Memorial Hall (Shijiken)

横井小楠 記念館

(四時軒)

ここから明治維新が始まった
龍馬が、松陰が小楠のもとに

「肥後にその人あり」と言われ、幕末から明治初期に活躍した横井小楠。勝海舟が高く評価し、吉田松陰、坂本龍馬といった明治維新の立役者たちが、こぞって小楠のもとに足を運んだ。

小楠は1809(文化6)年、熊本城近くの内坪井町で生まれた。幼くして藩校の時習館に入校し、塾長も務めた。1839(天保10)年、藩命で江戸に遊学し、水戸藩士の藤田東湖などと親交。酒席での失態から帰国を命じられた。帰郷後、家老の長岡監物らと研究会を開き、後に「実学党」を結成。自宅では私塾・小楠堂を開設し、多くの人材を育成した。

小楠が熊本郊外の農村、沼山津(現熊本市東区沼山津)の地に住まいを構えたのは1855(安政2)年のこと。門弟の河瀬典次や矢嶋源助との縁があったとされる。

小楠は自宅を「四時軒」と名付け、四季折々の美しさを楽しみながら暮らした。翌年の1856(安政3)年には矢嶋源助の妹・津世子と再婚し、長男の時雄(後に同志

社総長)、長女のみや子に恵まれた。その間、地元の人々たちとの交流もあったという。

四時軒には多くの人物たちが訪れ、小楠と議論を重ねた。坂本龍馬をはじめ、熊本藩士の井上毅、元田永孚、福井藩士の由利公正など、小楠から思想的な影響を受けて後に日本を動かす役割を果たした。

その間、小楠は福井藩主・松平春嶽の要請で4度福井に招聘され、幕府の政事総裁職になった春嶽の助言者として幕政改革にも関わった。明治新政府でも参与に登用されたが、1869(明治2)年に京都で暗殺された。

小楠の住居は、横井小楠記念館が建つ場所にあった。記念館に隣接する現在の四時



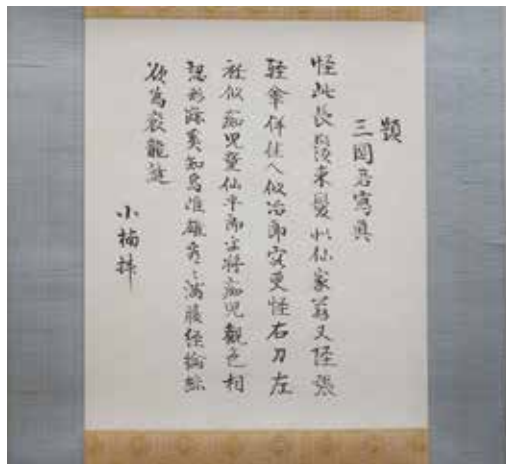
小楠が身を守るために使用した短刀
1869(明治2)年1月5日に小楠が襲われたとき、この短刀で相手の刀を防いだ。そのため、この短刀には3カ所の刃こぼれがある。



吉田松陰から小楠に宛てた書簡。



四時軒の棟札
建物の建築・修築の記録・記念として、建物内部の高所に取り付けた札。



横井小楠の書
三岡八郎の写真がガラス板写だったため、初め小楠は写真の裏表を間違え、右側に刀を差し、着物を左前(右衿を前にする着方)で着ているように見えたことから詠まれた詩。



松平春嶽から贈られた小楠の肖像写真。



被災後のすがた

熊本市東区沼山津の四時軒は熊本地震で倒壊した。復旧工事は2020（令和2）年8月から約1年半かけて行われ、伝統工法と耐震性を両立させた「明治期の四時軒」がよみがえった。



前震

4月14日の前震直後の四時軒。建物はまだ倒れてはいないが、瓦が落ちて散乱し、ひび割れが生じて小舞壁が崩れ落ちるなどの被害に見舞われた。



四時軒が建つ沼山津は地盤が軟弱で、電柱が倒れ、地面に亀裂が走るなど、周辺の民家も甚大な被害を受けた。



本震

1982(昭和57)年に復元された四時軒は、筋交いを入れて耐震性を高めていたが、2016(平成28)年4月16日の本震の強烈な揺れには耐えられなかった。



四時軒に隣接する横井小楠記念館は瓦が落ちる程度の被害にとどまったが、しばらくは雨漏りが続き、3カ月ほど休館した。展示物に被害はなかった。



本震で倒壊した四時軒。書斎のある広間や玄関など、1982(昭和57)年に建設された建物は全壊した。



明治期の四時軒に近づけるため、壁の塗り替えなど、
復旧作業は丁寧に行われた。

復旧現場から

伝統工法を守りながら
高い構造技術で
初期の姿を再現

熊本地震の震源地に近い「四時軒」は大きな揺れに襲われ、本震で全壊した。復旧工事は2020（令和2）年8月から約1年半かけて行われたが、設計は地震の翌年の2017（平成29）年に開始された。伝統工法を守りながら、地震の揺れにどう対応するか。設計と工事管理を手掛けた有限会社堀田総合設計（熊本市中央区）の代表取締役、堀田実さんに聞いた。



目指したのは
地震に強い伝統建築

四時軒がある熊本市東区沼山津の地盤は軟弱なため、倒壊した建物の基礎のコンクリートが20センチほど沈んでいた。そこで地盤の強化に取り組んだ。

明治期の建物は石の上に柱が載っているだけの構造で、大きな地震にはひとまりもない。現代の一般的な建物は地中に杭を打って地盤を固め、その上に基礎コンクリートが立ち上がる。ただ、建物の足元にコンクリートが見えると、伝統建築のイメージからかけ離れてしまう。そこで、堀田さんは地面に鋼管を打ち込み、地中にコンクリートの土台を造って見た目に分らないようにした。その上に礎石を載せて建物を組んでいった。

最も苦心したのは構造設計。明治期の建物は柱と梁で構成され、下見板張りや漆喰壁が用いられた。年月が経てば風合いが出るが、地震には弱い。そのため壁に筋交いを入れて耐震性を高める手法が採用されることが多い。1982年の復元時にも筋交いが用いられたが、外壁を増やすので日本家屋のすっきりした空間が損なわれてしまう。

「特殊な構造計算で、筋交いがなくてもある程度の強度が保てるように設計しました」と堀田さん。復旧された四時軒にはゆったりとした空間が広がり、小楠と同じように外の景色の移ろいが楽しめるようになった。



1982年の
復元時の資料を見直し

四時軒は明治、大正期の2度火災に見舞われ、1982（昭和57）年に隣接する記念館建設とともに復元された。熊本地震で倒壊したのは、このときの建物だ。

復元前に残っていたのは、玄関のある12畳の広間だけ。それ以外は焼失したため間取りさえ分からなかった。当時、市の担当者だった富永忠徳さんは、小楠の孫に聞き取りを行うなど、地道な調査を積み重ねて復元にこぎつけた。

今回の復旧工事にあたり、堀田さんは退職した富永さんに協力を依頼。富永さんが所有していた資料を見直し、残っていた建物の内外観や部材の写真、1981（昭和56）年に行われた解体経過の様子などを調べ、復元された設計図のマイクロフィルムにも目を通した。堀田さんは「オリジナルの四時軒に近づけるのに、写真や資料は大変役立ちました」と振り返る。



明治期と思われる
2本の梁を再利用

復旧工事は伝統工法にのっとり、残った部材をできるだけ再利用しながら進められた。

堀田さんは瓦や外壁の一部、壁の下地材、戸袋、建具など使える部材を選び出した。その中で注目したのは2本の大きな梁。1982年の復元の際、富永さんが焼け残った建物から選び出したものだ。「明治期の四時軒に使われていた可能性がある」と判断し、記念館との間の渡り廊下と客間に用いた。

「今回の復旧では、高い構造技術を用いてオリジナルの姿を忠実に再現することが重要だと考えました。倒壊した当時の建物とは違う部分もありますが、オリジナルの姿にこだわった結果です」と堀田さんは語った。





出入口の門は南向き、秋津川に面している。



しじけん

「四時軒」四季折々の眺めをめぐる意味で、小楠が名付けた。





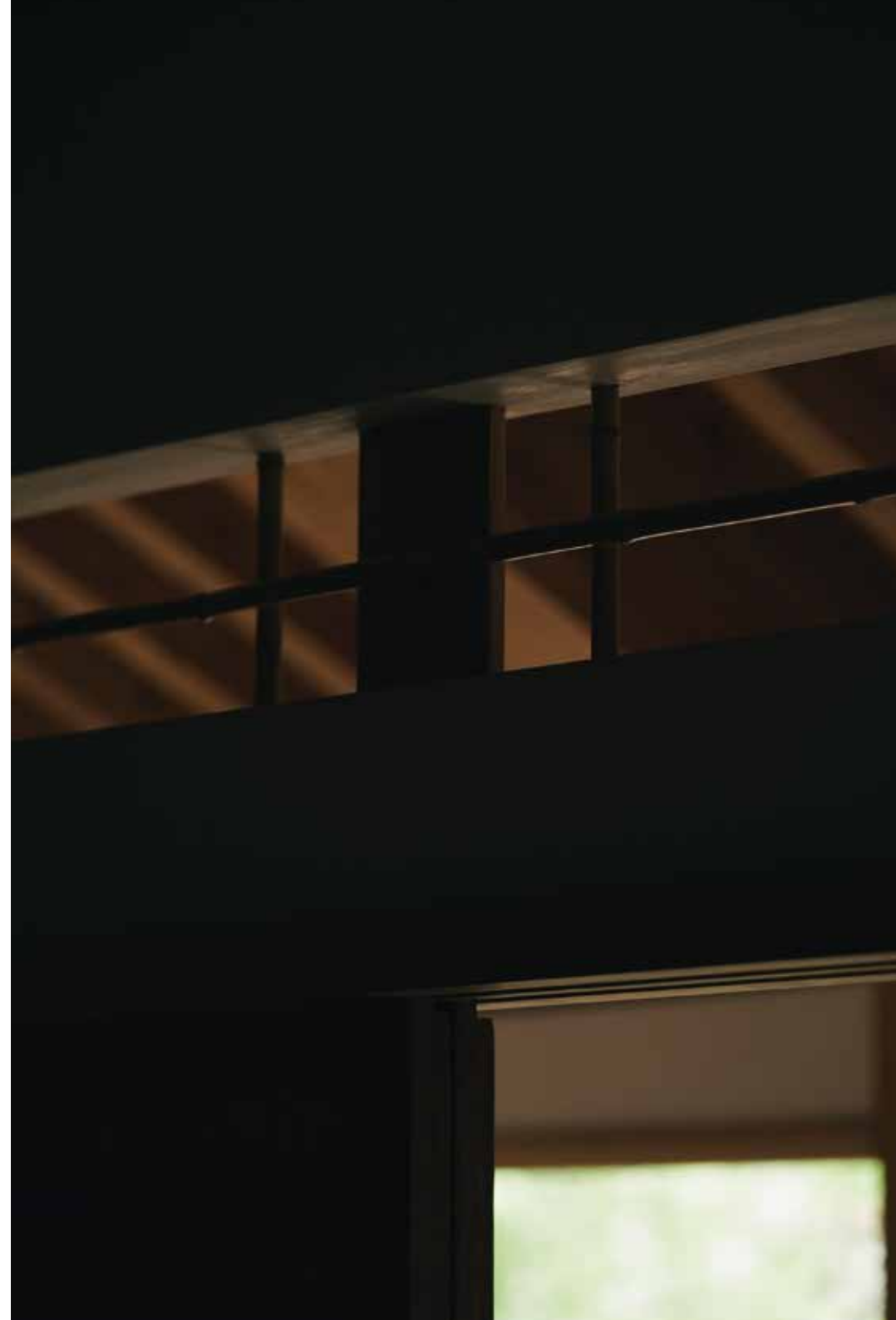
秋津川や飯田山、四時軒の眼前には
穏やかな田園風景が広がる。

復旧した四時軒は、`明治期のオリジナル`を
目指して設計された。





梁や建具、礎石などの使える部材は、できるだけ再利用されている。





特殊な構造計算で壁の筋交いをなくし、
伝統工法による日本家屋のすっきりした
空間を生み出した。





ゆかりの人

歴史の転換点となった場所 小楠に魅せられた 維新の立役者たち

2016(平成28)年4月の熊本地震のとき、横井小楠記念館の館長だった中島勝則さん。その2年前から代理館長、被災後も7年間館長を務め、在任中は多くの来館者と接し、見学に訪れる地元の小生らと交流を深めた。中島さんに横井小楠と四時軒について聞いた。



横井小楠記念館・
四時軒 前館長
中島 勝則 さん

昭和初めの四時軒



時習館の優等生で江戸に留学

疎外されても熊本を愛した小楠

―館長に就任された直後に熊本地震が
発生しました。被災状況はどうでしたか。

中島 地盤が軟弱な熊本市東区沼山津を大きな揺れが襲ったわけですから、四時軒は前震で建物が東に傾き、本震で倒壊しました。隣接する記念館は瓦が落ちて雨漏りしましたが、展示物に被害はありませんでした。

―小楠の生涯を
どうとらえていらっしゃいますか。

中島 小楠は藩校の時習館で塾長を務め、江戸に留学するなど優秀な人物でした。晩年は福井藩主・松平春嶽しやんかくの要請で福井に招聘しょうへいされて活躍し、幕政改革にも関わります。

しかし熊本は保守的な土地柄で、「肥後の引き倒し」と言われるように熊本藩からは疎外されました。熊本に生まれていなかったら、生き方は違っていたでしょう。でも逆に、熊本に生まれたからこそ、彼の思想が育まれたとも言えます。

官立熊本医科大学の初代学長だった山崎正まさ董たけが記した小楠の伝記には、「生まれ育った場所、血肉になった所なので、熊本を愛していた」という趣旨の下りがあります。彼は熊本藩士としての矜持きんちを持ち、生まれ育った熊本を生涯愛したようです。

―小楠が傾倒した実学とは
どういう思想ですか。

中島 「学んだことを実生活に生かす」という意味です。実学という言葉が出てくるのは、陽明学、朱子学を研究した江戸中期の熊本藩士・大塚退野の頃です。その思想が脈々と受け継がれ、後の実学党に結び付きました。

安らぎと議論の場だった四時軒 画期的な考えが人びとを集めた

―小楠が城下から沼山津に転居したのは1855(安政2)年です。転居後の小楠はどういう生活を送ったのでしょうか。

中島 自宅を「四時軒」と名付けたことからわかるように、四季折々の美しさを味わいながら過ごしました。家族と過ごし、季節の風景を眺め、村人たちと交流し、秋津川で好きな釣りに興じるなど、安らぎの場だったと思います。

一方、議論の場でもありました。後に熊本や日本を動かし人たちが四時軒を訪れ、小楠と議論を重ねました。彼はこうした人たちに

多大な影響を与えました。大日本帝国憲法の起草に参加した熊本藩士の井上毅、「教育勅語」で知られる元田永孚ながねなどです。福井藩士の由利公正が起草に加わった「五箇条の御誓文」や坂本龍馬の「船中八策」は、小楠が記した「国是七条」を参考にしているといわれます。

四時軒が議論の場になったのは城内から離れ、人の目が届きにくかったからではないでしょうか。小楠に人を引き付ける魅力があったことも要因です。人としての魅力、彼が説いた思想の魅力です。当時、画期的な考え方を持った横井小楠という人物に吸い寄せられるように人が集まったのです。

復旧した四時軒はしっかりした造りで、後世に残すべき建物です。歴史の転換点に重要な役割を担った場所を多くの人に訪ねていただき、小楠をはじめとする著名な人物たちの息づかいを感じてほしいと思います。



先駆者たちの系譜

The Genealogy of Pioneers

時代の先駆者といわれる横井小楠。小楠自身だけでなく、彼の縁につながる女性たちもまた、新しい時代を築いた先駆者たちだった。

小楠の妻津世子は、現在の熊本県益城町一帯を治める惣庄屋・矢嶋家の五女。矢嶋家当主・直明と妻の鶴子は二男七女に恵まれた。鶴子は、女子に教育は不要という風潮がある時代に、娘たちに手ずから熱心な教育を施した。

三女の順子は熊本女学校（後の熊本フェリス学院高校）閉校校長を務め、熊本の女子教育の礎を築いたといわれる。

四女の久子は、小楠の高弟であった徳富一敬と結婚し、言論界の重鎮となる蘇峰、ベストセラー作家の蘆花の母となる。娘の初子は、男女共学であった熊本洋学校に学んだ。久子は女子教育の必要性を痛感し、女子教育趣意書を創案した。

小楠と結婚した五女津世子は後に同志社大学第3代総長となる時雄、みや子の子どもたちに恵まれた。みや子もまた熊本洋学校に入学し、夫となる海老名弾正（同志社大学第7代総長）とは、いわば同窓生である。

そして、六女の矢嶋楯子は、小学校教諭から女子学院の初代院長に就任。禁酒・廃娯・一夫一妻制を唱える東京婦人矯風会（後の日本キリスト教婦人矯風会）を創立し、女性の地位向上に尽力した。89歳の時、ワシントン軍縮会議で東洋の平和を願う女性たちの心を伝えるため渡米。晩年まで衰え

竹崎順子、徳富久子、横井津世子、矢嶋楯子ら矢嶋家の姉妹たちは「四賢婦人」と称される。矢嶋家を復元した益城町の「四賢婦人記念館」では、彼女らの功績を発信している

ることのない情熱を持ち続けた。

矢嶋家の4人のこのような強い意志を持つ熊本的女性を、ジャーナリストの犬宅壮一は「肥後の猛婦」と名付けた。矢嶋家姉妹は「四賢婦人」とも呼ばれ、そのDNAは今も熊本県民に受け継がれている。



参考文献

・青木静子(2014)「近代日本(1868-1941)におけるハンセン病対策と3人の来日女性宣教師のハンセン病者救済活動」金城学院大学大学院文学研究科社会学専攻博士論文

・岩本税他(2007)『新くトピックスで読む>熊本の歴史』弦書房

・NPO法人くまもと漱石文化振興会・熊本大学文学部附属漱石・八雲教育研究センター編(2022)『アイラヴ漱石先生』集広舎

・菊地治編(2016)『花美術館』50号所収「特集 来熊120年、没後100年 夏目漱石」蒼海出版

・菊池市教育委員会(2001)『蘆花と愛子の菊池ふるさと文学選』熊本日日新聞情報文化センター

・熊本県立大学(2012)『ジェーンズが遺したもの』熊本日日新聞社

・篠田一人他(初版1965、新装版1997)『同志社大学人文科学研究所研究叢書VII熊本バンド研究』みすず書房

・平岡敏夫編(2007)『漱石日記』岩波書店

・『旅ムック』84号掲載「シリーズ熊本偉人伝Vol.18 矢嶋家の女たち」エース出版 <https://kumamoto.tabimook.com/greate/detail/18>

・夏目漱石記念年100人委員会(2018)『漱石の記憶 夏目漱石生誕150年 没後100年 2016・2017夏目漱石記念年』熊日出版

・西川盛雄(2017)『夏目漱石考 熊本時代を中心に』新宿書房

re:birth

熊本市記念館 熊本地震復旧の記録

2025(令和7)年3月31日

発行:熊本市文化市民局 文化創造部 文化財課

〒860-8601 熊本市中央区手取本町1番1号
TEL: 096-328-2740

編集:株式会社 談

